

文化的景観を基盤とした地域文化継承 のための地域学習手法の研究

田中 尚人¹

¹正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp

近年、地方都市や中山間地集落では、地域固有の祭りや年中行事の多くが、地域コミュニティに運営を託され、存亡の危機にある。一方、小学校では学習指導要領が改訂され「能動的で、対話的な深い学び」アクティブラーニングが推奨されるようになり、その実践には多様な主体の連携が求められている。本研究は、地域自治を基本とした持続的で自律的な地域文化継承のために、文化的景観保全の概念に基づいた地域づくりの学習、実践手法を開発するものである。本研究の目的は、地域学習における多様なステークホルダーの地域アイデンティティに対する認識を考察することとする。そのため、筆者らが実践してきたワークショップにおいて、風景が子ども達に与える影響、シビックプライド養成やメタ認知、相互承認による間主観性の獲得などについて分析した。

Key Words : civic pride, local identity, cultural landscape and local revitalization

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、地方都市や中山間地の多くの集落では、地域性の拠り所であった小学校が統廃合され閉校し、地域固有の祭りや年中行事が、全て地域コミュニティに運営が託され、存亡の危機にある。一方、小学校では学習指導要領が改訂され「能動的で、対話的な深い学び」アクティブラーニングが推奨されている。アクティブラーニングの実践には、学校内の先生方や教育者達の取組みが必須であることはもちろん、各家庭や地域社会の協力も求められる。まさに、地域の意志を育てる^[1]学校教育、社会教育、家庭教育の連携が求められている。

本研究は、地域自治を基本とした、自律的な地域文化継承のために、文化的景観保全の概念に基づいた地域づくりの学習、実践を行っていくための地域学習手法を開発するものである。筆者らは、文化的景観の概念を基盤とした参加型ワークショップ（以下、WSと略）において、風景が子ども達に与える、シビックプライド養成やメタ認知、相互承認による間主観性の獲得などに主眼を置き、プログラムを開発してきた^{[2][3][4][5]}。崎津や今富の風景を文化的景観の観点から、特に水辺や森、農地といったコモンズに対するコミュニティの働きかけについて分析することで、持続可能な自然環境や生活文化に対する、正当な参加の姿勢を身に着けることができる、と

考えた。本研究の目的は、地域学習における多様なステークホルダーの地域アイデンティティに対する認識を考察することとする。

(2) 研究対象地

本研究の対象地である天草地方は、主に天草上島、下島からなる島嶼群であり、天草市、上天草市、苓北町の3つの基礎自治体からなる。天草市は、2006（平成18）年3月27日、本渡市、牛深市、河浦町など2市8町が合併して誕生し、平成27年度の国勢調査による人口は82,739人の自治体である。（図-1参照）



図-1 天草市概要図（1/50,000地形図を基に筆者作成）

天草市の人口は、平成7年度が107,823人、平成17年度が96,473人（いずれも国勢調査データ）と減少しており、熊本県下でも人口減少が激しい地域である。

筆者らは2007（平成19）年から10年以上、天草市河浦町にある国選定重要文化的景観地区である崎津（さきつ）地区、今富（いまとみ）地区を合わせた「富津地区」のまちづくりに関わってきた。（表-1参照）

崎津地区は平成30年6月にユネスコ世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産となった。この間、閉校してしまった富津小学校の児童や、河浦高等学校の生徒らと実践してきた。

これらの学びは、地方創生が叫ばれるなか、急激に過疎化し高齢社会となる地方の集落において、今後たくさんの方からの観光客を受け入れ新たな観光産業を創出するため、地域文化に根差したグローバルな価値観を生み出し、緩やかな社会包摂を可能とする、よりよき地域社会づくりに貢献する、と考える。

表-1 富津地区におけるまちづくり活動

年	月	活動
2006年	11月	長崎県・関係市町が世界遺産の提案書を提出
2007年	1月	国内の世界遺産暫定リストに掲載
	4月	天草市文化課に世界遺産登録推進担当4名配置
	6月	崎津地区住民説明会（120名参加）
	7月	第1回文化的景観学術検討会
	9月	「世界遺産登録推進シンポジウム」（450名参加）
2008年	2月	富津地区7区155名、大江地区8区114名、説明会に参加
	4月	熊本県教育庁文化課内に「世界遺産登録推進班」設置
		●熊大1年生の学外実習として崎津のフィールドワーク実施
	8月	●崎津まち歩きワークショップ（35名参加）
	3月	文化庁専門官による現地調査
2009年	8月	第1回 文化的景観学術検討会
	11月	NPO「さいのつ」設立総会
2010年	6月	崎津地区景観協定運営委員会
	7月	天草市崎津地区「崎津の漁村景観」重文景に申請
	10月	第1回 文化的景観整備管理委員会
	1月	崎津ランドデザインワークショップ
	2月	「崎津の漁村景観」重文景に選定
2011年	4月	保存調査に着手
	5月	●富津まち歩きWS（約50名参加）
	8月	●崎津まち歩きWS（約50名参加）
	3月	天草市今富地区を追加申請
2012年	1月	●富津小学校にて地域学習「富津校区の〇を見つける」
	2月	富津小学校開校記念式典
	9月	●富津ラボ開設「秋の学校」開始
	10月	全国文化的景観地区連絡協議会が天草にて開催
		●風景デザインサロン開催
2103年	2月	●「みんなで作るう。地域のしるし」シンボルマークWS
	8月	みなとフェスティバルにて重文景のシンボルマーク発表
	9月	●富津ラボ「秋の学校」竹プランターづくり
2014年	2月	●第1回富津ラボ研究発表会
	5月	●富津ラボ「春の学校」河浦高校WS開始
	10月	●富津ラボ「秋の学校」今富フットパスコースづくり
2015年	2月	●第2回富津ラボ研究発表会
	5月	●富津ラボ「春の学校」河浦高校WS
	10月	●富津ラボ「秋の学校」今富フットパスコースづくり
2016年	1月	全国地域リーダー養成塾 九州ブロック情報交換会in天草
	2月	「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」世界遺産候補取り下げ
		●第3回富津ラボ研究発表会（県立大学と共同開催）
	7月	●まちづくり甲子園に河浦高校と一緒に参加
	10月	●富津ラボ「秋の学校」今富フットパスコースづくり
2017年	2月	●第4回富津ラボ研究発表会「河浦高校さよならフットパス」
2018年	6月	崎津集落の文化的景観が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」としてユネスコ世界遺産の構成資産に

2. 富津地区の文化的景観

本章では、崎津・今富地区の文化的景観の特徴及び構成要素について概要を説明した。

(1) 崎津地区

崎津地区は「海の天主堂」と呼ばれた崎津教会をシンボルとした集落と自然が一体となった景観を有しており、観光客も多く訪れる。1996（平成8）年には、「キリシタンの里 崎津」として日本の渚・百選に、「河浦崎津天主堂と海」として日本のかおり風景百選に、そして未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選に選ばれた。

崎津の重要文化的景観の構成要素として重要なものに、「カケ」と「トウヤ」がある。

カケは、主に漁師宅から海に突き出して設置したテラス状の作業施設である。かつては、海中よりシュロを支柱として立て、四方を結束して上に真竹を並べたもので、直接船への乗り降りを可能とする棧橋としても機能する他、崎津名物の干し物や漁具の手入れの場としても機能する。

トウヤは、海へ向かう1メートル前後の細い路地に、隣家から軒が延ばされてきた、半屋内空間である。漁師はカケや海に行く際にトウヤを通り、漁師以外の人でも漁村の生活の中で重要な情報交換や、交流活動の場として機能してきた。

カケもトウヤも、リアス式海岸が沈降してできた平場の少ない漁村集落において、漁師や他の人々が生活するために工夫して構築してきた人工環境であり、地域の風土をよく表す文化的景観である、と言える。これらの構成要素を保全するためには、漁業という生業が持続可能な形で営まれ、文化的景観の本質的価値が、地域住民と来訪者、そして基礎自治体の協働によって継承されることが重要である。



図-2 カケの風景



図-3 トウヤの風景

(2) 今富地区

崎津の入江の奥に位置する今富では、今富川の支流である2つの小河川が形成する谷地形に集落が形成されており、江戸時代から数度にわたる干拓により拡大された農地において、水田耕作が営まれてきた。

近世にカクレキリシタンの拠点とされた崎津教会も、もとは今富地区にあったとされ、その他のカクレキリシタン関連の遺産、遺構も今富地区には多く残っている。

今富から崎津へ農産物・林産物が崎津へ搬出される一方、崎津から今富へは水産物もたらされるなど、両集落の密接な関係は現在も維持されている。この両村の交流は、かつて主に女性たちの勤労により、山から海へ、海から山へ物々交換がなされていた「メゴイナエ」の歴史を有し、崎津・今富は一体となって、歴史的な「流通・往来」の拠点であるとともに、カケ・トウヤなど独特の土地利用の在り方を示す崎津の漁村景観、及び近世以降の干拓により農地を広げつつ山裾に集落を営んできた今富の農村景観による一体的な文化的景観を形成してきた。



図4 干拓農地の風景

図5 かけ判の墓地

3. 地域アイデンティティの認識に関する分析

本章では、これまで崎津・今富地区において筆者らが行ってきた地域学習における、様々なステークホルダーの地域アイデンティティに対する認識について、グループダイナミクス⁹⁾的に分析した。

(1) 地元の価値を発見するWS

2008年8月に筆者らが初めて崎津で行ったまち歩きWSから、2011年、崎津、今富の2地区で行ったまち歩きWSまでの3回のWSでは、文化的景観の保存・活用調査の一環として開催したものであった。

手法としては、子ども達とともに、家族の方々も一緒にまち歩きを行い、○(地域らしい、魅力的な)な風景と、×(いまいちな、改善すべき)な風景を見つけ、共有するという内容であった。

よそ者である大学生を含め、普段は一緒に地域を歩くことが少ない子ども達、さらにご家族の方々、多様なステークホルダーが、崎津地区、今富地区の風景に対して、どのような価値を見出すのが明らかとなった。特に、小学生以下の子ども達の参加によって、以下のような新しい視点を獲得できた。

- ・物理的に、低い視点からの価値把握ができた。
- ・子ども達の、大人が口にしないような、素直な意見がきけた。
- ・普段は、なかなかまち歩きなどのWSに参加しない、子育て世代の参加があった。
- ・ご家族の方々が、自分たちが子どもだった頃の地域の風景を思い出すことができた。

- ・よそ者の学生が、地元の方々とは違う認識を持てた。
- ・大人も、小学校の枠(PTAなど同世代)を超えた、地域における新しい結びつきが構築できた。
- ・都会の子ども達の参加もあり、地元の小学生が、崎津や今富にしかない価値(自然の豊かさや地域の方々との関わり方)に気づくことができた。



図6 まち歩きの風景



図7 発表の風景

(2) ふるさとを知るWS

2012年1月に、閉校間際の富津小学校で全校生徒28名(うち、欠席3名)を対象に行った地域学習「富津の〇を見つける、育てる」をはじめ、同年9月に、地元の方々のご支援で旧教頭先生宅をお借りして、文化的景観調査研究センター「富津ラボ」を立ち上げ、ここを活動拠点として行った「春の学校」、「秋の学校」、2013年に行った「みんなで作ろう、地域のしるし」シンボルマークWSは、地域の拠り所であった富津小学校閉校後のWSであり、様々な試行錯誤の中で「ふるさと」とは何かを知るWSであった。

具体的には、小学生を中心とした子ども達が、大学生や地域の大人達とともに、「当たり前にあるもの」例えば、通学路であったり、お祭りで高学年の生徒が叩いていた富津太鼓であったり、公園の遊具であったり、今富川のクレソンや崎津のカケやトウヤなどを、実際に自分たちの目で見て、何が特徴的なのか、それがどういう佇まいを見せているのかを観察し、明らかにするWSであった。

- ・なくなって初めて気づく「当たり前」の風景がある。
- ・子どもと大人で「当たり前」や「知っている」が違う。
- ・小学校が閉校したことで見えてきた、これまで活かしきれていなかったつながりが分かった。



図8 崎津のまち歩きの風景



図9 富津太鼓の練習

(3) ふるさとの価値を発信するWS

2014年5月から、あと3年で閉校が決まった熊本県立河浦高校の生徒たちとの協働が始まった。彼らは「河高

伝説を残そう」を合言葉に、富津ラボのWSや、様々な活動に参加してくれた。崎津・今富地区の風景をアピールするPVを作成したり、崎津みなとフェスティバルを活性化しようと作品を展示してくれたり、崎津に比べて若者の関与が少ない今富地区のフットパスコースを一緒につくってくれた。WSを通じて、地域住民にとって河浦高校の生徒たちは、必ずしも崎津・今富地域出身でなくても、熊本大学の学生よりも身近で、将来Uターンして自分たちとともに「ふるさと」を創っていく人材として、捉えられていた。

さらに、2015年からは河浦高校の生徒の有志が、世界遺産になる予定の崎津のボランティアガイドをやってみるようになった。ボランティア部の生徒達が、自分たちで崎津のことを学び、フリップに分かり易い説明を書き、自分たちの声で観光客に説明した。当初は「人前で話すのは恥ずかしい」と固辞していた生徒も、閉校直前の「さよならフットパス」では、見事なガイドを披露し、世界遺産ボランティアガイドの活動は、熊本県や天草市など様々な表彰を受けた。さらに、この崎津の世界遺産ボランティアガイドは、現在天草市立河浦中学校の生徒たちに引き継がれている。



図-10 今富フットパス



図-11 ボランティアガイド

4. おわりに

本研究では、天草市河浦町崎津・今富地区にて行ってきた地域学習における多様なステークホルダーの地域アイデンティティに対する認識を考察した。分析の結果、2008年から2017年までの一連の地域学習活動を3期に分けて考えることができ、地域住民、大学生、小学生、高校生らの地域アイデンティティの認識について、その構造と関係性の一部を提示することができた。

謝辞：本研究は、たくさんの方々にご協力頂いた。天草市河浦町崎津地区、今富地区の地域住民の皆さん、天草市役所の様々な部署の方々、富津小学校のみんな、河浦高校の生徒の皆さん、皆さんの学びによって、本研究は成立しています。記して感謝の意を表します。

参考文献

- [1] 伊藤雅春, 大久手計画工房: 参加するまちづくりワークショップがわかる本, OM出版, pp.13-14, 2003.
- [2] 川崎健史: 天草崎津地区における漁村景観の保全に関する研究, 熊本大学卒業論文, 2009
- [3] 川崎健史: 天草崎津地区における道を介した交流に関する研究, 熊本大学大学院修士論文, 2011.
- [4] 芥慎太郎: 天草今富地区における暮らしに根ざした景観構造に関する分析, 熊本大学卒業論文, 2012.
- [5] 原嶋香菜子: 天草富津地区における住民参加による場づくりに関する研究, 熊本大学大学院修士論文, 2013.
- [6] 杉万俊夫: コミュニティのグループ・ダイナミックス, 京都大学学術出版会, 2006.

(2019.7.8 受付)

Design of regional study method for transmission of local identity based on the cultural landscape

Naoto TANAKA

Recently, festivals and annual events in provincial cities and rural villages in the mountainous area are committed to the community management. And it is difficult for them to continue. On the other hand, in the elementary school curriculum has been revised, Active learning came to be recommended. The active learning demand active, interactive and deep learning to students. So, the collaboration between school and various stakeholders has been needed. This study develops practice technique and learning method of the community development based on a concept of the cultural landscape preservation. It will be important for the transmission of sustainable and autonomous regional cultural based on the local identity. The aim of this study is to consider recognition of the local identity of the various stakeholders in the community. Therefore, the relationship between cultural landscape and children in the workshop which have been practiced by the authors have been analyzed for considering civic pride training and meta-cognition, mutual recognition.